



卓 話



「奨学生報告」

元米山奨学生 朴 炫貞さん

皆様、こんにちは。去年度米山奨学生としてお世話になりました朴ヒョンジョンです。本日はよろしくお願い致します。



まず、自己紹介から始めたいと思っています。私の名前は朴ヒョンジョンです。この画面からもわかるように、真ん中の漢字は火に玄を組み合わせたものです。日本ではあまり目にする機会のない漢字ですが、この漢字は「明るい」という意味をもっています。つまり、自分の名前は木に人、火と玄、まっすぐ、という意味が含まれていて、光と影、自然と人間をまっすぐ表現していく今の研究ととても合うかな、と思いました。

私は「境界」をテーマにあげています。何かと何かの境界、いわゆる「間」を意味する韓国語は「サイ」です。サイという単語の発音にあたる日本語には、「際」や「再」があります。私が研究している映像やコミュニケーションは、時間を扱って新たな何かを創造するものにあたるので、このテーマと色々繋がることは偶然ではないと、自分の中では思っています。

そこで、「つくる、つなぐ」との発想がはじまります。私は映像によるコミュニケーション方法として大きく二つのテーマをもって活動しています。ここではその二つをご紹介します。ここでその二つをご紹介します。

まず一つ目ですが、この写真は何に見えますか？一見抽象的に見えるこの横線のあつまりですが、この青い写真は海に、こちらの方も風景にみえませんか。実はこの写真は、私が去年制作した作品「So Far, So Near」の一部分です。最初から最後まで窓枠しか出てこない作品であります。窓枠に溜まったほこり、錆びいったところ、剥がれたペンキなどに近寄って、カメラで撮影することで、窓枠という物の新たな魅力が発見出来るという作品です。これから4分間、この作品のフルヴァージョンをお見せした

と思います。

この作品の歌も、私がつくりました。遠くに行こうとする気持ちや、風景に対する個人の記録を音でも表現したいということから、韓国の子守唄をベースにつくりました。海辺に住む子どもの話が歌詞であるこの歌は、歌詞がなくてもそのメロディーだけで、あるノスタルジアが感じられるという評判でした。言葉がなくても、コミュニケーション出来るということが、映像と音の世界なのだと実感した作品でもあります。物事の見方を変えることは、窓枠という日常の見慣れた物から様々な風景という、新たな価値を発見することにつながります。皆様のおかげで、この作品はその思いが通じたのか、去年汐留クリエイターズコンペティションでグランプリを受賞した作品でもあります。

ここで二つ目に移りたいと思います。これから20秒ほどのアニメーションをお見せします。

このアニメーションは、子どもが描いた絵だけを使い、ストーリーをつくるアニメーションです。映像の基本である「時間」というものを、子どもにどのように説明するかということから始まりました。今は「みんなのもりプロジェクト」という名前で進めています。世界各国にいる子どもに、「もり」というテーマを与え、その子どもの絵だけで一本のアニメーションを制作することで、世界をつなぐ教育、環境保護につながります。そこで現在は日本と韓国でワークショップを開いて、絵を集めつつアニメーションを制作しています。

あるものをイメージして、そこに時間を与えて、その時間の変化により生じる表現が映像だといえるでしょう。映像というメディアをつかい、私は作品だけでなく、新たな関係を作りたいと思っているのです。人と人、国と国、文化と文化、デジタルとアナログ、現実と夢の間をつなぐことは、現代社会で最も大切なことでもあります。また、「つくる」という行為は、この社会を、人間を、より豊かに過ごせることが出来るようになることに繋がります。

一年間ロータリーでお世話になりながら感じたことは、関係が作り出す力、関心と支えが、また新たな力になり、世界を少しずつ変えているということでした。その中心にはやはり人という存在がありまし

た。私もそのロータリでの経験を忘れずに、映像を通じたコミュニケーションで、世界にもっといいエネルギーを発信していく」ことを頑張ります。これからつくりだす新たな映像、美術に、また表現、コミュニケーションに、もっと興味をもって見守ってくださるようお願い致します。その映像とコミュニケーショ

ンの可能性を信じて、様々な領域をつなぐ、社会の架け橋になるように、これからも一生懸命研究と作品制作に専念します。

一年間、お世話になりました。本当にありがとうございました。また本日のご清聴にも感謝致します。